「片耳だけで聞くような聞き方があります。相手が何を言おうとしているのかを既に分かっていると決めつける聞き方です。これは忍耐のない、不注意な聞き方であり、兄弟を軽んじ、ただ自分が話す機会を伺って、相手を追い払おうとしているに過ぎません。…今日の普通教育でさえ、人は真剣に耳を傾けてくれる存在によって助けられることが多いと理解しています。そして、この洞察に基づいて独自に心のケアの方法を築き上げ、キリスト教徒を含む多くの人々を惹きつけているのです。しかし、キリスト者は忘れています――聞くという務めは、偉大な聞き手である主ご自身から託されたものであり、私たちはその働きを担うべきであることを。私たちは神の耳で聞き、神のことばを語る者とならなければならないのです。」(ディートリヒ・ボンヘッファー)

※箴言 18:13
「よく聞かないうちに返事をする者は、愚かであって、侮辱を受ける。」

〇聖書の知恵を追い求めて：“耳”に関する愚か者の三つの態度

1. **愚か者は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿に耳を傾けない(箴言 1:7; 13:13)**

※箴言 1:7; 13:13
「主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒を**さげすむ**。」
「みことばを**さげすむ者**は身を滅ぼし、命令を敬う者は報いを受ける。」

※ゼカリヤ 4:10
「だれが、その日を小さな事としてさげすんだのか。…」

※箴言 10:17
「訓戒を大事にする者はいのちへの道にあり、叱責を捨てる者は迷い出る。」

※箴言 16:20
「みことばに心を留める者は幸いを見つける。主に拠り頼む者は幸いである。」

※2 テモテ 3:15-16
「…聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」

(*ローマ 10:17「信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストについての御言葉によるもの」)

※詩篇 119:72
「あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。」

※創世記 2:16-17
「神である主は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」」

※創世記 3:1
「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」

2. 愚か者は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿にのみ耳を傾ける（箴言 12:15; 13:1; 15:31-32）

※箴言 12:15; 13:1; 15:31-32

「愚か者は自分の道を正しいと思う。しかし知恵のある者は忠告を聞き入れる。」
「知恵のある子は父の訓戒に従い、あざける者は叱責を聞かない。」
「いのちに至る叱責を聞く耳のある者は、知恵のある者の間に宿る。訓戒を無視する者は自分のいのちをないがしろにする。叱責を聞き入れる者は思慮を得る。」

※箴言 13:10
「高ぶりは、ただ争いを生じ、知恵は勧告を聞く者とともにある。」

3. 愚か者は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（箴言 18:2, 13; 29:20）

※箴言 18:2, 13; 29:20

「愚かな者は英知を喜ばない。ただ自分の意見だけを表す。」
「よく聞かないうちに返事をする者は、愚かであって、侮辱を受ける。」
「軽率に話をする人を見ただろう。彼よりも愚かな者のほうが、まだ望みがある。」

「愚か者は心を閉ざし、口ばかり開いています。小さな心に大きな口を持っているのです。人の話には耳を貸さず、すぐに自分の考えを言いたがります。彼の魂には高慢さが根を張り、自分の考えこそ、皆が従うべきものだと信じ込んでいます。自分の賢さをひけらかしますが、それがかえって自分の身を滅ぼすのです。神は私たちに耳を二つ、口を一つ与えられました。それはきっと、話すことよりも、二倍よく聞きなさいという教えなのでしょう。」

※ヤコブ 1:19
「愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。」

※ピリピ 2:3-5
「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」

「交わりにおいて、他者に対してまず果たすべき奉仕は、彼らに耳を傾けることです。神への愛が神の御言葉を聞くことから始まるように、兄弟姉妹への愛もまた、彼らに耳を傾けることを学ぶことから始まります。神が私たちに示される愛とは、御言葉を与えてくださるだけでなく、耳を傾けてくださることでもあるのです。ですから、私たちが兄弟に耳を傾けることを学ぶとき、それは神ご自身の業を行っているのです。クリスチャン、特に牧師たちは、人と共にいるときには常に何かを語らなければならない、それこそが自分の果たすべき務めだ、と考えがちです。しかし、耳を傾けることが語ること以上の奉仕になりうることを忘れています。多くの人々は、自分に耳を傾けてくれる存在を求めています。ところが、クリスチャンの間ではそれを見いだせないことがあります。なぜなら、耳を傾けるべきときに、語ってばかりいるからです。兄弟の言葉を聞くことのできなくなった者は、やがて神の言葉にも耳を傾けなくなるでしょう。…長く、忍耐強く聞くことのできない者は、やがて的外れなことばかりを語り、本人は気づかなくても、実際には他者に向かって真に語ることはなくなってしまいます。自分の時間はあまりにも貴重で黙っていることに費やす余裕はないと考える人は、やがて神や兄弟のために時間を割くこともなく、ただ自分と自らの愚かさのためだけに時間を費やすようになるでしょう。」(ディートリヒ・ボンヘッファー)